

愛知県美術館研究紀要 開館20周年記念号発刊にあたって

愛知県美術館は平成24年10月に開館20周年を迎えました。コレクションは、前身の愛知県文化会館時代のものを含めて8000点近くに達しています。それは20世紀の美術を基軸とし、これに藤井達吉コレクションや木村定三コレクションを加えて、質的に優れているばかりか、ジャンルの広がりにおいても非常にユニークなものになっています。それらは現状でも、さまざまな切り口による展示活動を可能としていますし、今後の調査研究対象としても新たな価値や活用を見いださうな潜在力を秘めています。美術館では、この作品群をコレクション展などで展示公開するとともに、その延長線上に位置づけることのできる企画展を開催してきました。それは近代、現代美術を中心に、時には古代や中世、近世の美術までを取りあげる幅広いものです。それに加えて、保存分野における活動や、教育普及活動への取り組みなども含め、コレクションに基本をおいた開館以来の活動は大きな成果をあげてきたものと確信しています。

これら美術館の幅広い活動を支えるのが調査研究活動であることはいうまでもありません。とりわけ根幹であるコレクションについての不断の研究とその成果の公開はきわめて重要な位置を占めています。例えば、一般に美術館で収蔵されている作品のなかに直接に展示公開に結びついていないものがあることに対して、作品を死蔵しているのではないかという指摘をうけることがあります。それは美術館における収集活動と保存継承という本質的な役割を理解しないものであり、美術館人としては極めて不本意であるという思いを抱かざるを得ません。美術館においてコレクションを展示公開することが活動の柱であることは言うまでもありません。しかし、それが全てではなく、コレクションそのものは独立した目的や方針のもとに集められ蓄積され継承されていくべきものです。そして、それらの作品や関連資料は、時代的な関心や新しい科学的方法といった多様な角度から調査研究がなされ、展覧会はもとより美術史や作家研究などにその成果が反映されていくことが肝要なのだと考えます。それ故、美術館の責務として、コレクションを中心とした作家や作品の研究が行われ続けなければならない、そこで得られた知見や成果は、展覧会の企画立案などの事業や関連刊行物に反映され、また研究紀要等を通じて公開、報告されて行かねばなりません。

当館では、そのように調査研究活動の重要性を認識し、開館の翌年度には研究紀要第1号を創刊し今日まで刊行を続けてきました。さらに木村定三コレクションの受入にともない平成18年からは、同コレクション研究紀要の刊行も同時に行ってきました（本書資料編p.26全索引およびp.33の図版参照）。これらで報告された調査研究の成果は、当館の学芸員のみならず、外部の専門家の方にも参加していただきながら進めてきたもので、コレクション研究を中心に、さまざまなテーマによる研究報告を重ねてきました。私たちは、開館20周年を一つの節目として、今回、これまでの研究紀要の成果を総括するとともに、今後に向けて再編成を行うことにいたしました。その主たるところは、美術館の研究紀要と、木村定三コレクションの研究紀要が並行して刊行してきたことで、外部の専門家から掲載論文等へのアクセスが難しいというご指摘に対して、これを名称は愛知県美術館研究紀要として一本化した上で、木村定三コレクションをその分冊とすることにいたしました。また、そこに論文だけでなく、事業報告や資料についても積極的に掲載し、外部での活用も念頭にいた情報公開に取り組んでいこうということを考えています。

美術館は今、日本社会の大きな変化のなかで、従来の活動を維持継続し、社会のなかでより重要な役割を果たしていくことが困難な状況に置かれています。それだけに、そこで行われる調査研究とその成果の公開は、館の活動を支えるという非常に重要な意味を担っています。このコレクションをはじめとする美術館における調査研究は、企画展の開催等の展示活動、教育普及活動の展開、作品の保存と環境整備、そして事業評価にまで及ぶ実に幅広いものです（本書資料編p.31 過去の傾向と特色）。この研究紀要のこれまでとこれからが、今後の美術館活動を支える軸骨であるということに思いを新たにしています。最後になりましたが、調査研究はもとより、作品の収集や展覧会活動をはじめとする当館の活動にご協力いただきました方々に心よりのお礼を申し上げますとともに、ますますのご指導とご助力をお願い申し上げます。

愛知県美術館 館長 村 田 眞 宏